

大江健三郎 いかに木を殺すか



文藝春秋

いかに木を殺すか



文藝春秋

いかに木を殺すか

昭和五十九年十二月二十日 第一刷
昭和六十年四月十日 第三刷

定価 一、三〇〇円

著者 大江健三郎

発行者 西永達夫

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三 郵便番号一〇二

電話東京(〇三)二六五局一二一一

印刷 精興社 製本 加藤製本

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

© Kenzaburō Ōe 1984

Printed in Japan

いかに木を殺すか 目次

揚げソーセージの食べ方

7

グレート島のレントゲン画法

33

見せるだけの拷問

69

メヒコの大抜け穴

109

もうひとり和泉式部が生れた日

169

その山羊を野に

191

「罪のゆるし」のあお草

227

いかに木を殺すか

285

装 幀 司 修

*カバー W. Blake の Songs of Experience を模写

*表紙 W. Blake の Songs of Innocence (Infant Joy) を模写

*見返し 武満徹作曲「雨の樹」の楽譜原稿 © 1981 Schott Japan

* 日本音楽著作権協会（出）許諾第八四六五一〇九四〇三号

いかに木を殺すか

揚げソーセージの食べ方

数日のシンポジウムの発言者として、あるいは短期の客員研究者として、アメリカの大学の教員宿舎に滞在する。大学の歴史が、あるいは大学人の歴史が、地道なりに洗練させているコンチネンタル風朝食に、僕としていささかの不満もない。夕食には学生たちが、土地柄の、いずれも生きいきした暮しぶりをあらわす大学近辺で、中国料理かメキシコ料理の店に行く。そこが難民に近い人たちの新規開店で、アルコール飲料の許可をとっていない場合、店の帰りにやはり学生のための酒場で、水差しに注いだビールを飲んでくる。もともとが、口腹の贅沢な楽しみにしての自己規制を、性に合ったものに見出す世代として、充分な食生活ということが出来る。

そこで自炊の必要はないのだが、宿舎に閉じこもって、公開セミナーの発言の要旨づくりと、英訳への確かめを続けている週末など、広いキャンパスを横切って学生街に出て行く時間を惜しむことがある。そういう際の昼食には、滞在者が共用するキッチンで、——現に僕がいまいるカリフォルニア大学、バークレイ校での実際をいえば、韓国製の即席めん、台湾製の冷凍された野菜、いた^めを組み合わせるようなことをする。

こういうつましい食事は、少年期の半ばから家族と離れて暮してきた僕に、むしろ親しいも

のなのである。それもごく短い時間につくりおえ、ごく短い時間に食べてしまう。いま自分の家族を持ってからも、むしろそういう食事のマナーが常態である。年に数度の料亭の会食で、談論に熱中してくると、膝の前の漆塗りの食膳のあたりに、仲居なり芸者なりの、抑制した蔑視の気配を感じとることはしばしばあった。しかもとくに気にかねぬのもあったのだ。

それがいま宿舎の、手術台を置くのにふさわしいような、白く塗った共用キッチンの、調理台にも使われるテーブルで食事しながら、ある変化を感じとるのである。豌豆の莢や、ブロッコリーの小さな房、あるいはモヤシのひと筋を、舌さきで撫でいつくしむ仕方、夢の動作のようにゆっくりゆっくり味わって食べている…… — おい、おい!? と自分に声をかけて、いつものあわただしい食べ方に戻るのだが。

そうしながら、思いは久しぶりに兵衛伯父さんへ行く。糸じりがないので熱い湯をそそぐと指の支え方に困る、セラミックのドンブリを食器としているのだが、食事の後、それを洗う水が指から手頸を冷やす感触に、これという理由は思いつかぬまま、さらにも兵衛伯父さんへの思いをそそられるのである。あらためて、—— おい、おい!? と口に出しながらの薄笑いが、頬骨のあたりにこわばりつくのを感じる。

正直に言えば、このところそれはしばしばの経験なのだ。そういう時、居室に戻ってベッドに横になると、枕もとの、旅に携行する常備薬のような本のなかに、兵衛伯父さんが『南伝大蔵経』の一冊として生涯読みつづけた、ブッダの「大いなる死」の記録、つまり『大バリニッパナ経』の岩波文庫版がふくまれているのをあらためて認める。そこでいま僕として意識化しうる範囲の、—— おい、おい!? の内包するところを書きしるしたいと思う。

そもその話が、兵衛伯父さんを「伯父さん」と記述するのは、一種便宜的な仕方すぎない。この言葉の正確な使い方とは別のものだ。兵衛伯父さんの生涯について、とくに最晩年の生き方、死に方について、親戚の間に複雑な感情があるのでもあり、僕と兵衛伯父さんとの間に、「伯父さん」と甥の関係は具体的な事実としてはない、とあらかじめいっておきたい。もっとも僕の家族にとっては、「伯父さん」「叔父さん」「伯母さん」「叔母さん」、あわせて母方、父方それぞれの従兄弟という関係が多数にのぼり、いりまじり、とくに祖父の代までは、近くに住む親戚間の縁組が無造作におこなわれたので、伯父でありながら従兄でもあるような、しかも兄弟同様に親しく暮してきた親戚がいる始末だ。

それでも兵衛伯父さんをオジサンと呼ぶ時には、これまでいつも当の漢字が頭にあったと思えるし、レヴィリストロースの親戚関係研究で、僕と兵衛伯父さんとの実際の関係が——おおいに心理の深層に関わりつつ——母方の伯父と自分の、関係のありようにつうじると自覚されるのである。ともかくは兵衛伯父さんと表記することで進めて行きたい。

戦争が行われていた時代の幼・少年時の、正月の朝の儀式。三方に盛られた米と裏白の上に、お供えの重ね餅をかこみ、蜜柑と干し柿、干し栗が載せてある。いったん神あるいは祖先のためにまつられたこれらの品々を、年齢順に祖母と両親の前を膝行して——祖母が欠け、父親が欠けて、母親のみの、ということにすぐにもなったのだが——お辞儀をし、さてひとつ自分のもっとも好むものを選びとり、柏手を打って引きさがり、思いおmoiの場所で食べる。それは正月の朝

の、別にお年玉などの風習はない村で、というのは子供らが金銭を出して買い物をする、外で食事なり映画を見るなりする、ということは谷間でありえぬのであったからだが、もっとも特別の日としての緊迫感のあじわえる行事なのであった。

演劇的ともいいたいほどに、そこには葛藤の要素もふくまれていた。身体的かつは心理的な、演劇のパフォーマンスで、それはあった。子供のおのおのが三方から取りあげる、神あるいは祖先に捧げてのちの賜わり物は、当の子供にとって、その年のかれの生き方、つまりは運勢と志を占い、かつ固めるための、祈りと意志表示のシンボルであったから。シンボル作用、つまりそれらの小さな食物と、子供の頭の概念をむすぶ媒介物としては、単純な言葉遊びのレヴェルがあるのみだったけれども。あるいは食物の、あじわいや歯ごたえ、舌ざわりなどが直接喚起する、想像力の遊びのレヴェルがあるのみだったけれども。

干し栗、干し柿、蜜柑、それらの持つ呼び名と味わいそのもの、素材としての特質に仮託された意味について、いまはつきり思い出せるものは、干し栗をひとつの極に、そして干し柿をもうひとつの極に置く対立のみである。とくに干し栗の、勝ち栗とも呼ぶことに由来するシンボリズムは、いまでも深いところでの痛覚すらともなうものとして、僕の記憶にきざまれている。ところが干し柿と蜜柑の対立と、それに発する各々の意味づけとは、かつては定義の根拠も必要でないほど明確であったのに、いやむしろそれゆえに、いまの僕には思い出す手がかりとてないのがある。つまりは僕にとって、今年もやはり干し栗をとるのかどうかに、儀式の頂点の緊張は、やはり正月の風糸がピンピン宙空に鳴るようにも張りつめて、おのき昂揚し、集中していたのだ。

なぜ緊張するか？ 感覚の核心、情動の核心において、あるいは自然に発するすべての思いにおいて、幼年期から少年期に移行しつつある僕は、ひたすら干し柿をとることを熱望していた。戦時の地方の小さな村における、甘い嗜好品の徹底した不足。不足というよりも、むしろ欠落。自分のうちの、なにやらえたいの知れぬ、しかし健康な勢いにちがいない変化の、不安な思いに揺れている細胞すべてが、ほしがっているようである甘味。干し柿は、冬の間およそ唯一の甘味であって、その甘い固体としての濃厚さ、もし当の言葉を子供の僕が知っていたなら、それによって胸にきざんだにちがいない、爛熟した甘さにおいて、蜜柑の果汁の淡白とは比較にならぬ、特別な嗜好品であった。日頃、子供らが干し柿を決してもらえぬというのではない。春までに、子供らのひとりあて、四、五箇の干し柿は配給されただろう。実際に自分のものになった干し柿が、歯で噛まれ舌にのり、喉におくりこまれるセンチシンの、あまりに甘美な経験であったから、それを極度にまれな食物と記憶しているのかも知れないのだ。

しかし、なおはつきりしているのは、いったん祖先へ、また森のなかの村の共同の祖先である神へ供えられる、お正月の三方の上の食物は、それも干し柿は、さらに特別のものであったということである。僕の家の場合、干し柿のための渋柿は、家の裏から川原へくだる斜面の——戦争が進行し、食糧難となつてからは、わずかばかり甘薯と小麦が耕作されるようになった畠の——年老いた、高い柿の木から採取された。長い竹竿の先にきざんだ割目に、実のついた枝をささみ、振り取った柿を、祖母と母とが皮を剥き、荒縄に吊るして干しあげる。もとより総体の数に限度はあり、一箇ごと大小の不揃いがある。大きくふくらんで、ぼつてりと充実してもいる干し柿、

裂くと赤黒いゼリーのような、濡れてすらいいる果肉があらわれ、種子をおおう半透明の膜など、なお生きているような、極上等の干し柿は、ただお正月の三方を介してのみ、子供らの手にふれうる対象となる。つまり子供らの誰でもそのひとつを、祖先や、共同の祖先としての神から一対一の関係であたえられ、三方の前から引きさがることが出来る。それから自分として好む家の隅っこで、心ゆくまで絢爛たる甘味をあじわうことができるのだ……

ところが僕は、戦争がはじまってから、ああ、一度なりと、三方の干し柿を取らなかつたのだ！ 弟や妹があたりまえのように干し柿をとるにまかせて、自分は褐色に乾からびた、干し丹波栗を取ったのである。乾いた粗皮を剥き、干し柿への遺恨をこめて甘皮を乱暴にはじきとばし、干し栗の実の、味もそっけない固まりを、唾で濡らしつつ噛む。そのうち臉を閉じている眼の前が、ボーッとあからむような頼りなさで、わずかな甘みが感じとられる。しかし噛みこなされた栗の実は、すでにあらかたのみこまれたあとだ……

そんなひと粒の干し栗を、なぜ干し柿のかわりとして、毎年、毎年、頭の芯が痺れるほどの緊張の果てに、お正月で、めずらしく腕首まで清潔になっている手を伸ばしてつかみ、涙ぐみさえしかねぬ、赭らんだ顔をうつ向けてひきさがったか？ 祈念のため、それはほかならぬ国家的な祈念のためであった！ 干し栗は、勝ち栗。年頭に勝ち栗を選びとって、戦う少国民の僕は、大東亜戦争の勝利を、祖先と、共同の祖先たる神に祈念したのだ。そのように干し栗をとった後、頭をさげ両掌を叩いて、心のうちに祈る言葉。それはもう国家に關してのものではなかった。干し柿のかわりに干し栗をとることで、僕はもう充分に少国民の公的義務を果たしたわけだ。どうしてそれ以上のことがもとめられよう？ 祈りは僕自身の、将来にかけて開く運命に關していた。